

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K22145

研究課題名（和文）女性の職業キャリアの記述と計量分析への応用

研究課題名（英文）Description of Women's Occupational Career and its Application to Quantitative Analysis

研究代表者

黒川 すみれ（Kurokawa, Sumire）

東京大学・社会科学研究所・特任助教

研究者番号：10883431

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：社会学では女性の就労に関する研究が数多く蓄積されてきたが、職業経歴が意識や就業行動へ与える影響を検証した研究は少ない。その理由は、職業経歴を説明変数に据えるためには個人が歩んできたキャリアを記述して変数化しなければならないが、この操作化に技術的・手法的限界があったからである。本研究では、系列分析の手法を職業経歴データに応用することで、女性のキャリアパターンを変数化した。過去の職業経歴が現在の階層帰属意識に及ぼす影響を検証したところ、過去の職業の下降移動の経験等が、現在の階層帰属意識を低下させていることを明らかにした。現在の意識に過去の就業経験が影響していることを具体的に実証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会学における女性就業に関する研究では、過去の就業経験やその蓄積が現在の行動や意識にも影響を及ぼす可能性と、その検証の重要性が主張されながらも、多様化する女性の職業キャリアを描き出す十分な記述方法がなかったために、過去の蓄積が現在の行動や意識に及ぼす影響を検証しきれなかったという問題があった。本研究はこの限界を超えるためのキャリアの記述方法を提言し、かつ、キャリアが現在の態度や行動、意識に及ぼす影響の実態とメカニズムを解明したものである。

研究成果の概要（英文）：Although sociology has accumulated a large number of studies on women's employment, few studies have examined the impact of occupational career on attitudes and employment behavior. The reason for this is that there are technical and methodological limitations in the manipulation of the occupational career of individuals, which must be described and made into a variable in order to use the occupational career as an explanatory variable. In this study, the method of series analysis was applied to the occupational career data, and the career pattern of women was used as a variable. The influence of past occupational career on the current subjective class identification was examined. We found that past experiences of downward mobility in the past occupations reduced the current subjective class identification. We demonstrated that occupational career influences current attitudes.

研究分野：計量社会学

キーワード：職業キャリア 女性の就業 就業行動 社会意識 職業経歴データ 系列分析

1. 研究開始当初の背景

今日の女性の職業キャリアを議論するうえで、1990年代はバブル崩壊や人口構造の変化、就業に関わる社会制度の整備など、様々な面で大きな転換点を迎えた重要な時期であった。バブル経済の崩壊によって日本が長期的な経済停滞に陥る中で、若年主体であった労働力が中高年化し、1997年には15歳から64歳のいわゆる生産年齢人口が減少に転じた。労働力不足が潜在的な問題としてあったことに加えて、グローバル化による競争が激化した。同時に、育児休業法の制定とその法改正や、介護保険制度などの両立支援制度の拡充、男女雇用機会均等法の改正などにより、女性を基幹的労働力として活用する取組がなされるようになる。1990年前後に労働市場へ参入した女性たちは、様々な構造的・制度的背景が入り混じる中でキャリアを積み重ねた世代であり、まさにキャリアの多様化を描き出していた世代である。

働く女性を取り巻く就業環境が大きく変化したと同時に、社会学研究においては女性の就労に関する研究が盛んに行われるようになった。なかでも計量的手法を用いた研究は、就労情報を尋ねる社会調査が多く実施されるようになったことと、データや分析課題に合った分析技法が適用されるようになったことによって大きな成果を出してきた。その代表的な例が職歴研究である。職歴は、現在の職業上の地位に至るまでの経歴を示すものであるが、職歴を職業的地位の移動、すなわちキャリアの展開とすると、女性のキャリアに関する研究は大きく3つに分類できる。

第一に、女性のキャリアやその時代的推移を記述する研究である。公的統計をもとにある年齢時点の就業形態の分布を比較したり、フルタイム就業の継続率を比較する研究がある。第二に、職業移動の規定要因に着目する研究である。転職や就業継続/中断の要因を明らかにする研究であり、労働政策へのインプリケーションを導出するための労働社会学的研究や、世代内移動を扱った階層研究などがある。第三に、キャリアが諸変数へ与える影響に着目する研究である。キャリアと老後の貧困リスクの関連や、結婚への移行との関連などを明らかにする研究がある。こうした3つのキャリア研究のなかでは、第三の研究の蓄積が圧倒的に少ない。なぜなら、キャリアを説明変数に据えるためには個人が歩んできたキャリアを記述し、変数化しなければならぬが、この操作化に技術的・手法的限界があったからである。

過去(キャリア)が現在(行動や態度、意識)を規定するという仮説が検証されるべき課題として共有されながらも、手法的限界のために適切にキャリアのもつ効果を実証することが出来ずにいたというのがキャリア研究に残る課題であった。この状況の打開のため、キャリアの記述を可能にする分析手法としてDHDの援用を提案し、DHDによるキャリアの記述と変数化が日本のデータの分析においても有効であることを確認したうえで、女性のキャリアという時間的蓄積がもつ効果を検証する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、女性の職業キャリアが現在の態度や行動、意識とどのように関連しているかを実証的に明らかにすることである。本研究は、これまでにどのような働き方をしてきたのかというキャリアの時間的蓄積が、現在の行動や意識に及ぼす影響について、その実態とメカニズムの解明を目指すものである。

3. 研究の方法

使用するデータは労働政策研究・研修機構が2013年に実施した「職業キャリアと働き方に関するアンケート」調査データと、東大社研パネル「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査(JLPS: Japanese Life Course Panel Survey)」データである。説明変数にはDHDで作成したキャリア変数を設定する。被説明変数には、現在の行動や状況を示す変数として求職活動や不本意非正規労働、現職の入職経路などを設定し、現在の意識変数として生活満足度や階層帰属意識などを設定する。どのようなキャリアを歩んできた女性がどのような求職活動をし、不本意な非正規就業に就いているのか、また生活満足度が低い/高いのかなどを明らかにすることで、女性の就業やキャリアアップの支援策の提言に繋がるとともに、過去の経験が現在の意識に影響する意識形成のメカニズム(個人内での過去と現在との比較の可能性)の議論にも繋がる。

4. 研究成果

本研究ではまず、職業経歴データを用いて系列データ分析を行い、女性のキャリアパターンを類型化した。「職業キャリアと働き方に関するアンケート」を使った分析では、一定の職業キャリアの「長さ」を確保するため、調査時点で壮年期(35~44歳)である女性を対象とした。従業上の地位(雇用形態)と職種の組み合わせによって職業キャリアの記述を試みた結果、有職女性で8つのパターン、無職女性で6つのパターンに職業キャリアを分類した。就業継続・中断と転

職によって、女性には流動的かつ多様なキャリアがある様子を具体的に描き出すことに成功した。具体的には、初職の雇用形態（主に正規雇用）や職種を移動することなく就業を継続するパターンや、20歳代に正規雇用から非正規雇用へ転換して就業を継続するパターン、就業を辞めて無業状態を継続するパターン、非正規雇用で再就職するパターンなど、キャリアの内容は多岐にわたる。女性の職業経歴を雇用形態と職種の2つの視点から同時に記述したことで、非正規転換や転職がどの職種間で生じているのかを明らかにした。

また、「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査（JLPS）」の若年パネル・壮年パネルを用いた分析では、調査時点で有職であった女性を対象に過去14年間の職業キャリアを記述・類型化した。分析の結果、7つのキャリアパターンを抽出し、各雇用形態の継続就業パターンのほか、無業継続パターン、正社員としての働き方を中断したパターン、就業再開パターン、転職パターンなどが得られた。

類型化した女性のキャリアパターンを説明変数として計量分析に適用して、過去の職業経歴が現在の階層帰属意識に及ぼす影響を検討した。分析からは、現在の職種がブルーカラー職種であっても、一定の無業期間をはさんでから非正規雇用労働となる再就職型であるならば階層帰属意識に影響はないが、ブルーカラー職種の継続就業だと階層帰属意識は低くなることを明らかにした。就業を継続してきたか否かによってブルーカラー職種での就業経験の効果が異なることは、キャリアパターンを考慮したモデルによる分析を行うことで明らかとなった知見である。また、正規雇用から非正規雇用へ、ホワイトカラーからブルーカラーへの変化という、いわゆる職業の下降移動の経験が、現在の階層帰属意識を低下させていることを明らかにした。現在の意識には過去の就業経験が影響しており、分析の際には現職だけではなく職業経歴も考慮する必要があることを示した。

有配偶女性に着目すると、過去14年間の働き方の変化は配偶者（夫）の所得水準とある程度関連していた。無業を継続していた女性の夫は高所得でかつ上昇傾向にあること、就業（正規雇用・非正規雇用の区別に関わらず）継続している女性の夫は所得が中程度水準で安定していること、若年カップルの女性は途中で就業の中断があり、一方で夫の所得は比較的低水準だが上昇傾向にあることなどが明らかとなった。女性は、ライフステージや夫（世帯）の経済的状況によって働き方やキャリア形成の内容に違いがあることが窺える。「無業継続」キャリアをもつ女性は、現在の階層帰属意識が高いことから、女性の収入が無くても（もしくは少なくとも）生活を維持できる生活基盤が長期にわたって確保できていることが、階層帰属意識を高める要因になった可能性がある。キャリアパターンの有意な効果が分析によって確認されたことから、過去の就業経験や職業経歴のあり方が、現在の意識に影響を及ぼすことを実証した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 黒川すみれ
2. 発表標題 壮年期女性の職業キャリアと階層帰属意識
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 黒川すみれ
2. 発表標題 女性の働き方と意識の変容 東大社研パネル調査（JLPS）データの分析（6）
3. 学会等名 第94回日本社会学会大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------